

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：32693

研究種目：挑戦的萌芽

研究期間：2009～2011

課題番号：21659539

研究課題名（和文） 若年認知症者における就労型デイサービスの効果：  
参加者間の相互作用と BPSD研究課題名（英文） Efficacy for patients with early onset dementia of adult day service  
offering work opportunities: Interaction and BPSD seen among  
participants

研究代表者

千葉 京子 (CHIBA KYOKO)

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：40248969

研究成果の概要（和文）：就労型デイサービス（就労型・地域型活動）の場における参加者間の相互作用には安定化した相互作用と不安定な相互作用がみられた。次に、安定化した相互作用場面を取り上げ、どのように相互作用を行っているかを明らかにした。相互作用の構造と秩序の一端として、若年認知症者によるパッシングとケア提供者によるパッシング・ケアが組織されていることを見出した。また、BPSD は配偶者による介護的関わりに対し大声で拒否することが見られたのみであった。就労型デイサービスは若年認知症者の相互作用を促進し、BPSD を軽減する効果があることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Interactions between patients with early onset dementia were examined at an adult day service center that provides opportunities for various work activities so the patients would not be isolated in the community. Then, we identified scenes of stable interaction and examined exactly how they interact. It was found that such interactions involve passing by the early onset dementia patients and passing care by the care givers. With regard to BPSD, only one patient was seen yelling at his wife refusing her caring involvements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	0	1,200,000
2010 年度	700,000	0	700,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	270,000	3,070,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：若年認知症・若年性認知症・相互作用・ケア・BPSD

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 若年認知症とは、若年期認知症（18 歳～40 歳未満に発症）と初老期認知症（40 歳～65 歳未満に発症）の両者を含む、認知症性疾

患の総称として用いられている造語であり、現在では若年性認知症と表記されることが多くなってきた。本研究では家族会の多くが用いている若年認知症という表記を用いる。

若年認知症は老年期認知症の有病率に比べ非常に少ないが、若年認知症は社会的かつ家庭的においても重要な役割を担う年齢層に発症し、認知症の行動・心理症状 (behavioral and psychological symptoms of dementia : BPSD) が老年期認知症と異なり「意欲低下、無気力」「興奮」が多い。出現しやすい BPSD が異なるということは、ケアも異なったものとなり、求める社会サービスも異なってくる。若年認知症者を対象に趣味活動やアートセラピーによるデイサービスの効果を検討したものはあるが、就労型デイサービスに参加しての効果を検討した研究はない。

本研究であつかう就労型デイサービスとは、介護保険の通所サービスとは異なる。職業の継続が困難となるなど社会生活が自立出来なくなってきた若年認知症者を対象とし、就労型活動や地域型活動により社会的孤立や進行の予防、そして地域のネットワークの開拓を目的とした活動である。この活動は日本では 2007 年から開始されている。したがって、このような活動において若年認知症者がどのような相互作用を行っているか、またどのように相互作用を行っているかを明らかにした研究はない。さらに活動に参加する若年認知症者の BPSD の変化を前向きに検討した研究はない。本研究により体系化されていない若年認知症ケア構築に向けての基礎資料を手に入れることができると考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は若年認知症ケアを構築する一助として、2007 年から日本で初めて取り組まれている就労型デイサービスの効果を、参加者間の相互作用と BPSD の変化を縦断的に探究することである。

上記の目的のもと、本研究では以下の課題に取り組んだ。

- (1) 「仕事」を通じて社会参加する活動の場で、若年認知症者がどのような相互作用を行っているかを明らかにする
- (2) 若年認知症者がどのような思いを抱いて活動しているかを明らかにする
- (3) 安定化した相互作用場面を取り上げ、若年認知症者がどのように相互作用を行っているかを明らかにする
- (4) 「仕事」を通じて社会参加する活動の場で、若年認知症者がどのような体験をしているかを明らかにする

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン

質的記述的研究である。

### (2) 研究参加者

就労型・地域型活動に参加している 50～60

代の若年認知症者 5 名、CDR(Clinical Dementia Rating) 1 とケア提供者 (スタッフと支援者) 5 名である。研究補助参加者として若認知症者の配偶者 4 名である。

### (3) データ収集

2010 年 2 月～2 年間、フィールドワークを 1～2 回/月、10 時～15 時までの活動時間に参加し、スタッフとともに活動の支援を行い「観察者としての参加者」として参加観察を実施した。得られたデータは毎回のフィールドワーク終了、観察メモや記憶をもとにフィールドノートに記述した。

観察だけではわかりえない研究参加者の感情や思いや認知を、より明確に把握するために半構造化インタビューを実施した。若年認知症者へのインタビューは半年以上の間隔において 2 回～4 回実施した。失語症状が中等度の 1 名は実施できなかった。ケア提供者へのインタビューは各 1～2 回実施した。研究補助参加者である配偶者へのインタビューは各 1 回実施した。

安定化した相互作用場面をとりあげ、若年認知症者が他者とどのように相互作用を行っているかを明らかにするため、ビデオ撮影を 2 日間行った。

### (4) データ分析

参加観察により記述したフィールドノートを繰り返し読み、コーディングを行い、テーマを抽出した。個別のインタビューデータから逐語録を作成し、意味内容のまとまりごとに区切って語られたテーマを抽出、共通するテーマをカテゴリ化した。ビデオデータは相互作用場面を書き起こし (トランスクリプト作成)、会話分析に基づき相互作用がどのように行われているかを分析した。言語障害を抱える若年認知症者が活動の場において、どのように相互作用を行っているかを明らかにするには会話分析が適している。それは会話分析にはコミュニケーション障害での会話を対象としても、ブレない一貫した方針があるからである。

研究代表者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

以下の番号は、「2. 研究の目的」に記述した課題の番号に対応している。

- (1) 「仕事」を通じて社会参加する活動の場で、若年認知症者がどのような相互作用を行っているかを明らかにする

データ収集期間は 2010 年 2 月～5 月。研究参加者はアルツハイマー型認知症者 3 名と前頭側頭型認知症者 2 名、合計 5 名とケア提供

者（スタッフと支援者）5名である。ケア提供者とともに活動支援を行い、「観察者としての参加者」として参加観察を行った。5日間の観察場面から見出された相互作用は【作業工程の明示化による新たなスキルの獲得】【ユーモアによる場の和み】【わかることの伝え合い】【活動の場における介護の拒否】等であった。これらは活動の場を安定化した相互作用と不安定な相互作用に分類できた。不安定な相互作用場面ではBPSDが見られた。これは、仕事を行う活動の場で介護行為を受けることへの抵抗として、大声を出して拒否するというBPSDになっていると考えられた。

(2) 若年認知症者がどのような思いを抱いて活動しているかを明らかにする

データ収集時期は2010年4月と2011年1月。研究参加者はアルツハイマー型認知症者3名、活動の参加年数は1~2年である。個別インタビューを各2回実施した。活動への思いを述べている内容を抽出しカテゴリ化した。その結果、体験参加で、認知症と思われる人が参加している場に自分が参加することへの【疑問・違和感】を抱いていたが、妻の勧めで参加を始めた。【活動の楽しさ】があり、【言われた通りに出来る】と思っていた。しかし、革細工、文字や絵を描いて作成する仕事であることから【期待に応えたいという焦り】を感じることもあった。活動を継続する理由は1日中自宅で生活する状態では【孤立化への恐怖】を抱くからでもあった。活動を通して関わる機会が続くことで【メンバーとのつながり】を感じていた。なかには【症状の進行に対する危惧】を抱き、活動中止となる事態を予測している人もいた。

(3) 安定化した相互作用場面を取り上げ、若年認知症者がどのように相互作用を行っているかを明らかにする

データ収集期間は2011年3月。研究参加者はアルツハイマー型認知症者2名とケア提供者2名である。どのように相互作用を行っているかを明らかにするため、ビデオ撮影を2日間行った。撮影時間は366分30秒であった。そのうちの安定化した相互作用場面と思われる70秒間選択、トランスクリプトを作成し会話分析を行った。分析の結果明らかになったことは、若年認知症者とケア提供者は「挨拶」-「挨拶」、「誘い」-「応答」などの発話タイプから構成される連鎖のタイプをとっていた。また、若年認知症者は会話を理解できているようにあいづちや視線を向けるなど話し手への反応を行っていたが、それらがパッシングであることも明らかとなった。会話を十分理解できていないことを示す「質問」を發した若年認知症者に対し、ケア提供者がパッシング・ケアを行っているこ

とが見出された。以上より、若年認知症者がどのように相互作用を行っているかの秩序の一端が明らかとなった。

(4) 「仕事」を通じて社会参加する活動の場で、若年認知症者がどのような体験をしているかを明らかにする

データ収集時期は2011年8月。研究参加者はアルツハイマー型認知症者1名、CDR1。半構造化インタビューの分析結果から以下のことが明らかとなった。Aさんは、固有の能力を尊重された「活動」を行えることから、期待に応えることができ、ありのままを支持してくれるスタッフとの関わりから自己の凝集性を高め、自信をもつ自己対象体験を得た。「活動」の場で行われている個別支援は、①個人の能力にあわせた活動の選択、②細やかな作業指示（準備からが作業・一動作の原則・手本の教示・自分で確認・小さな目標・できたら次へ）、③作品を通して固有能力の肯定的評価、④ユーモアを活用した開放感の提供、と考える。活動の場が固有能力を生かした社会的なつながりがある環境だからこそ、Aさんの体験が得られたと考える。関係として、若年認知症者とスタッフの間に共感的心理的環境が築かれていることが重要であろう。

以上より、就労型デイサービスは若年認知症者の相互作用を促進し、BPSDを軽減する効果があることが示唆された。支援のあり方をさらに検討するために、今後は若年認知症者とスタッフの相互行為の分析を重ねていくことも必要と考える。そして診断後の早い時期に、多くの若年認知症者がこのような「活動」に参加できるよう、個別支援が行える「活動」の場の拡大や就労支援を含む具体的なケアの充実が急務と考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 千葉京子、若年認知症者へのケアの記述に会話分析を応用して、インターナショナル ナーシング レビュー日本版、査読無、Vol. 35、No. 3、2012、pp. 36-43、

〔学会発表〕（計4件）

- ① 千葉京子・比留間ちづ子、就労型・地域型活動に参加している若年認知症者の体験、第13回日本認知症ケア学会、2012年5月20日、浜松
- ② 千葉京子、小山幸代、若年認知症者のための就労型支援の場の意味-相互作用の分析から-、第31回日本看護科学学会、

- 2011年12月1日、高知
- ③ 千葉京子、比留間ちづ子、就労型・地域型活動に参加する若年認知症者の「活動」への思い、第12回日本認知症ケア学会、2011年9月24日、横浜
- ④ 千葉京子、小山幸代、比留間ちづ子、就労型・地域型活動に参加する若年認知症者の「活動の場」における相互作用、第11回日本認知症ケア学会、2010年10月23日、神戸

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

千葉 京子 (CHIBA KYOKO)  
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号：40248969

### (3) 連携研究者

小山 幸代 (KOYAMA SACHIYO)  
北里大学・看護学部・教授  
研究者番号：70153690